

2020年度 第2回 ライフステージ事例検討会 報告書	
日時	2020年8月4日(火) 17時45分～18時45分
開催施設 参加者数	金沢大学24名、福井大学11名、富山大学1名、金沢医科大学2名、石川県立看護大学12名、信州大学5名、 金沢赤十字病院0名、石川県立中央病院7名、公立能登総合病院0名、金沢医療センター6名、 公立松任石川中央病院10名、 富山県立中央病院2名、富山市民病院0名、富山赤十字病院0名、富山県済生会富山病院5名、 富山県済生会高岡病院0名、厚生連高岡病院0名、黒部市民病院7名、 飯田市立病院0名、諏訪赤十字病院2名 会場参加 計94名 その他 個別のオンライン参加 計60名 合計154名
テーマ	「急性期病棟に入院する認知症がん患者の疼痛看護」
発表者	福井大学医学部附属病院 高野 智早さん
<p>【質問内容と返答】</p> <p>Q認知症ケアチームの介入により副次的効果はあったか。 A: 抑制の必要性の判断やせん妄予防について助言をもらった。認知症ケアチームにより、効果的な介入が行えた。</p> <p>Q認知症ケアチームの構成はどのようなものか。 A: 認知症CN、精神科医師、OT、精神保健福祉士がおり、活動4年目になる。</p> <p>Q手術に関する術前ケアはどうしていたか。 A: 術後のイメージがつかない方だったため、イラストやDVDを用いて専門的部分は省略して説明した。反応は「ふーん」や頷きなどみられ、理解している様子であった。</p> <p>Qエンパワメントとはどういうことか。 A: 食べるのが好きという強みがあった。入院前の生活を理解し、術後のやりたいことを見据えて、患者の治療を意欲を支えることができたと思う。</p> <p>Q介入し疼痛の変化はどうであったか。 A: 自己表出がない方で客観的指標をもとにみていたため、変化は評価しにくかった。しかし術後の急性疼痛が落ち着き、デイに行けるようになるなどしていたため、改善傾向にあったのではないかと思う。</p>	
ミニレクチャー	認知症がん患者の疼痛マネジメント